

第二 1907年「癩予防二関スル件」

である。さらに説経節の中のしんとく丸が、僧侶の法話を聞くという口実で天王寺へ連れ出されたのに対し、『莠伶人吾妻雛形』では、名医にかかるためという口実で天王寺へ向かうのも、18世紀の観客の日常生活に医療・医学が深く浸透し、影響力を持つようになってきていたことを伺わせる。

5) 『摂州合邦辻』

「業」と家の「恥」

『摂州合邦辻』では家出をする際に俊徳丸自らが、次のように独白する。

「思ひも寄らず悪病に、苦む我が身は前世の業。唯悲しきは高安の、家名を汚す残念さ。嘸父上の御無念と、思ひ廻せば身も世もあられず。生害せんと思へども、老ひたる父に先立つ事、不孝の中の随一と、聞けば死なれぬ我が命。とあつて館にあるならば、自然と世上の人も知り、父上ばかりか先祖の恥」

俊徳丸は「癩」におかされたことを、「前世の業」の結果だと考えているとともに、そのような「業」の深い病にかかることを、「家名を汚す」と認識している。「日本六十余州を廻り、神社仏閣に歩みを運び、前世の悪業滅しなば、それぞ誠の罪障ざんげ、思ひ切つたり迷はじ」と家出を決意する。その際の置き手紙には、「計らざる身の業病。人中の交りも叶ひ難く、家の恥、父の御恥辱と存じ候へば、身の御暇を賜はり、仏神に一身を抛ち候はば、せめて悪業も滅し、快気の時節も候はんと、御名残惜しき父上を振捨て、唯今国遠仕り候」と記している。「癩」は「業病」であるという認識が、仏神に帰依し、「業」をさらすことによって病が快気するという思いを強くしている。

明け方に人目を忍んで俊徳丸を見舞った父親は、次のように述べる。

「ヤレ俊徳よ必ず嘆くな、癩病とても百病の数には洩れず、聖人孔子の門人にも癩疾の賢人あり。いかなる高位高官も通れぬ病は恥ならず。人は何ともいはばいへ、我が子の病をうるさしとも、穢らはしとも思ふ親が三千世界にあるべきか。もしや若気に恥辱と思ひ、短気な心も出ようかと案じて老の口も合はず。」

父は俊徳丸が「癩」を恥じて、「短気な心も出ようか」と心配するが、その一方で息子の見舞いだというのに、わざわざ明け方に人目を避けて訪れている。それは父もまた、この病を「恥辱」だと思ふからだろう。

見舞いの直後に俊徳丸が家を出たことを知った父親は、蟬丸説話を引き合いに出して、息子の行為を肯定する。

「俊徳が業病も、過去遠々の報いと思へば、假令家出に及ばずとも、往来しげき街に捨て、前世の罪を償はんと予てより我が存念。某が詞も待たず国遠せしは遺きずがにも通俊が子にてありけるぞや、天晴健気の俊徳丸。さしも孝ある身の上に類少き難病は、何の因果ぞ恨めしや、其儘に打捨て置く父難面つれなしと恨むるな、例は恐れある事ながら、延喜帝第四の皇子、蟬丸の宮も難病故、逢坂山に捨てしぞよ。唯何事も定り事薄き親子の縁ぞと諦め、悔むな俊徳、我も歎かじ